

君の素顔に恋してる

Yuwa & Ren

伊東悠香

Yuka Ito



エタニティ文庫

目次

君の素顔に恋してる

5

真っ赤なドレスで抱きしめて

275

書き下ろし番外編

深まる愛と素顔の意味

319

君の素顔に恋してる

私の心や表情を明るくしてくれる魔法。それはメイクだ。
 気分の乗らない日だって、お化粧をするだけで前向きになれる。
 私、須藤優羽は高校生の頃、とある理由からメイクに目覚めた。それ以来、毎朝自分自身に魔法をかけている。

今日も私は、魔法をかけるために鏡の前に座った。
 隙のないばつちりメイクも好きだけど、今日はわけあって、派手な印象は禁物。というわけで、清楚系に仕上げる予定だ。

昨日の夜は丹念にスキンケアをしておいたから、肌の弾力は合格。さらにメイク崩れを防ぐため、化粧水を肌にしつかりなじませる。

（緊張して汗をかきかもしれないから、汗止めのクリームも塗っておかなくちゃね）
 下地を塗ったら、日焼け止め効果もあるBBクリームの出番。その上から、透明感を出すためにパウダーを軽く重ねると、自然な素肌感に仕上げるができる。

「次は……眉ね」

ここはミスが絶対に許されないとこ。眉の形で、印象がグッと変わるからだ。眉山の位置を意識して丁寧に眉を描いていく。

ブラシでぼかして自然な眉に仕上げた後は、鼻を高く見せるためのノーズシャドウを入れ、アイメイクに移る。

アイラインは、ナチュラル感を保つために目尻には引かず、黒目に近いところだけ引いた。そして薄いブラウンのシャドウを瞼にのせる。

まつげを自然に盛るために、ビューラーで精一杯上げる。そこにマスカラ下地、マスカラの順で塗っていき、ボリュームを出した。

ばつちりメイクの時は、『グラデーションシャドウ&がつつりアイライン&つけまつげ』も必須なのだけど、仕事モードではこのくらいがベストだろう。

仕上げは唇だ。今日の化粧に合った色の口紅を丁寧に重ねていく。

（よし……こんなもんな）

メイクタイムが終了し、鏡の中の自分に笑いかける。すっぴんの時よりも目鼻立ちがはつきりした私は、自信がありそうに見えた。

今日、私が清楚を心がけながらメイクをしているのには、わけがある。

さかのぼること、数週間前。四月のはじめ頃、私の勤めていた会社で上司が部署のメンバーを集めて、衝撃的な事実を告げた。

「えっ、倒産？ ……冗談ですよ？」

みんながどよめく中、私がこぼした言葉に、上司はうんざりした表情で首を横に振った。

「残念だが本当だ。一週間以内に私物を持ってこの会社を出て行くようにと、社長から通告があった」

「そんな……」

(この会社ですつと頑張っていたつもりだったので)

大学を卒業して入社し、早四年。新卒で採用してもらったこの会社には、恩義を感じていた。できるなら三十代になっても四十代になっても、ここで働き続けたいと思っていたのに――

(……いきなり人生設計が崩れた)

そんなわけで、平凡OLの私は、突然求職活動をしなくてはならなくなった。

けれど、思うように次の仕事が見つからない。かといって仕事をしなくても生活できるような余裕もない。

困った私は、当面の生活のため、派遣会社に登録することにした。

するとトントン拍子で派遣先を紹介してもらえて、今日はその派遣先と顔合わせをする大事な日なのだ。

清楚系メイクを施した私は、派遣先の企業の大きなビルの一室で、姿勢を正して座っていた。先方の担当者は、もうすぐ来るらしい。

(挨拶を兼ねたものだから面接じゃないって言われても、やっぱり緊張しちゃうよ) それぞれしている、隣に座る派遣会社の担当者が、私に耳打ちした。

「須藤さん、あまり緊張なさらないでください。あなたの職務経歴ならきっと歓迎されると思いますよ」

「ありがとうございます」

私は曖昧な笑みを浮かべて答え、再び前に向きなおる。

(契約期間が半年っていうのは短いけど……とりあえず、生活のため。それに、ここみたいな大企業で仕事をすれば次の仕事に繋がりがやすいはずだし！ きっとスキルアップもできるだろうし！)

そんなことを考えていると、部屋のドアが開いた。

「お待たせしました」

「いえっ」

椅子から立ち上がり、部屋に入ってきた男性を見た途端、私は驚きで目を見開いた。

(せ……先輩っ?)

すらつとした長い脚、しっかりとした肩幅、整った顔。高校時代に憧れたその人が、目の前に立派な成人男性として立っていた。

男性は一瞬訝しげに私を見るが、すぐに興味なさそうな顔になり、私の目の前まで足を進める。

「わざわざお越しくださり、ありがとうございます」

「こちらこそ、貴重なお時間をいただきまして、ありがとうございます」

頭を下げながら、彼の様子をうかがう。

(私のこと、覚えてないのかな。もしかして、先輩じゃないの? いや……私が彼を見間違うはずがない)

仕立てのいいスーツをビシッと着こなし、できる男の空気をまとっている。それは高校時代とは異なる姿だけど、彼は間違いなく桐原先輩だ。

「初めまして。私、副社長の桐原と申します」

丁寧に差し出してくれた名刺を、私は頭を下げながら受け取る。

(桐原蓮……やつぱり、桐原先輩だ)

「桐原さん、今日はよろしくお願ひいたします」

派遣会社の担当さんが挨拶すると、先輩は頷き、「座ってください」と促した。

「は、はい。失礼いたします」

「では……簡単にお話を聞かせていただきますね」

先輩も席に着くと、私と担当さんを見比べながら淡々と話を進めていった。

まずは簡単に業務内容を説明してくれる。それは、前の会社でやっていたこととあまり変わらないようなので、きつと問題なくできるだろう。

そう答えた私を、先輩はまっすぐ見つめてくる。

「契約期間は短いのですが、大丈夫ですか?」

「はい。大丈夫です」

「失礼ですが、アルバイト感覚でいらっしやるということはありませんか?」

鋭く射貫くような視線を向けられ、私は緊張でこわばる。

(先輩……昔より凄みが増した?)

「いえ、仕事には責任を持って取り組ませていただきます。期間が短いからといって、中途半端に仕事をしようという考えもありません」

なんとかそう答えると、彼は納得したように軽く頷いた。

先輩は、まるで私に仕事を任せていいのか、見極めているかのようだ。

単なる顔合わせで面接ではないはずだが、彼の目は厳しい。派遣会社の担当さんも怯んでいる。

私たちの様子には構わず、先輩は続ける。

「仕事への真面目な姿勢はわかりました。では最後に……あなたには、仕事に対する信条がありますか？」

「信条……座右の銘めいごみたいなものですか？」

「そうですね」

（まさかここでそんなことを聞かれると思わなかった）

やや面食らいながらも、私はいつも心に留めている言葉を口にした。

「信条と言えるかどうかわかりませんが、大切にしている言葉は『無心』です」

「どういうことか、もう少し詳しく説明してもらえますか」

「は、はい」

私は一呼吸おいて、ゆっくり説明した。

「目標に向かって、無心に取り組むことを心がけている……ということですが」

説明を聞いた先輩は、ずっと引き結んでいた口元をかすかに緩めた。

「……いい答えだ」

その低い声に、心の奥うらみが疼く。

（この言葉、あなたからももらったものなんですよ）

複雑な気持ちで先輩の表情を見てみると、彼はパンフレットを差し出してきた。

「あなたには、営業部に所属していただく予定です。部署の配置や会社の細かいことは、このパンフレットに載っているので、目を通しておいってください。あなたの方で気になることや質問はありませんか？」

「は、はい。大丈夫です」

私の返事を聞くと、先輩はすぐに立ち上がった。

「今日は以上です。お疲れ様でした」

思いのほかあっさりと顔合わせの終了を告げられる。

「来週の五月一日からよろしく」

「あ……」

手が差し出されたのを見て、私も慌てて立ち上がり、彼の大きな手を握る。

「こちらこそ、よろしく願います」

（先輩の手だ）

懐かしい指先に触れ、こんな場面なのに頬が熱くなってしまふ。

こうして、短期とはいえ私の新しい仕事が決まった。

顔合わせの緊張と思いがけない再会で疲れ果てた私は、アパートに帰るなりベッドに倒れこんだ。

「派遣先で、まさか桐原先輩に会うなんて……」
 (そういうえば先輩、大企業の御曹司っていう噂だったな。あの若さでもう副社長なんだ……)

握られた手をじっと見つめ、また頬が熱くなってくるのを感じる。

(私ってば未練がましいいな……まだ引きずってるの？ もうずいぶん前の話なのに)

私は高校時代、女子バスケットボール部に所属していた。運動が得意というわけではなかったけれど、体を動かすのは好きだったから。

それに、かっこいいなと憧れて^{あこが}いた桐原先輩が男子バスケットボール部に所属している^{と知り}、少しでも接点を持ちたいという気持ちもあった。

万年補欠で試合にはまったく出られなかったけれど、少しでも上手くなりたくて、練習は真面目にやっていた。桐原先輩がストイックに練習する姿を見て、影響されたというところもあったのだけど。

そんな高校二年生のある朝、私はこっそり練習しようと、体育館を訪れた。

(よかった……誰もいない)

軽い準備体操をした後、苦手なシュートの練習をはじめた。でも、フリースローライオンからのシュートがまったく決まらず、バックボードに当たっては落ちる。

(試合でシュートを決めてみたいなあ……。まあ、万年補欠の私には、そんなチャンス

すらないんだけどね)

肩を落として転がったボールを見つめていると、体育館に私以外の足音が響いた。

「雑念だらけ。そんなんじゃ、シュートが決まるわけないよ」

「え……」

振り向くと、そこには制服姿の桐原先輩がいた。彼はコートに入ってきて、ボールを拾い上げる。

(どうして先輩がここに?)

「ここに立つ時は、余計なことは考えないで、無心になるんだ」

彼はそう言いながら私の横に立ち、ボールを頭上で構えると、ごく自然に手を離す。それは美しい弧を描きながら、導かれるようにゴールネットに収まった。

「すごい……」

(力んでる様子もないのに、計算されたように綺麗にゴールに入った)

「難しいことじゃないよ。やってみる?」

「あ……はい」

私が^{うぶす}頷くと、先輩は自分のシュートしたボールを拾い、私に持たせる。その時、指先がわずかに触れた。

「きやつ」

ドキッとして、思わずボールから手を離してしまう。ボールは大きな音を響かせ、弾みながら転がっていった。

「ご、ごめんなさいっ」

「いいよ。まあ、今のは俺の持論だから……君は君のやり方を見つけるといい」

それだけ言い残し、先輩は体育館を去った。その後ろ姿は凜としていて、目を離せない。

（先輩と話ができた……先輩の指に触れられた）

ボールを拾い上げながら、私は今までの憧れよりずっと大きな気持ちで、自分の胸に芽生えるのを感じた。

おそらく、これが先輩への恋のはじまり。

それ以来、彼を見かけるだけで足が止まり、声を聞くだけで胸が苦しくなった。

見ているだけの片思いがこんなにつらいのかと、眠れない夜をいくつも過ごした。

そんな当時のことを思い出し、胸がぎゅつと締めつけられる。

（先輩は私にとって忘れられない存在。だけど、彼は私を覚えてもいない。……こんなふうに再会しちゃって……私、平気でいられるのかな）

この日の夜は先輩のことを考えて複雑な気持ちになり、なかなか眠れなかった。

そして迎えた入社初日。やはり清楚な心がけ、派手にならないように気をつけながらも、しっかりとメイクを施して部屋を出る。緊張のあまり、食欲はなかった。

（先輩のことは気にしないで、今は仕事を覚えることに集中しよう）

意を決して、私は気後れするほど大きなビルに足を踏み入れる。受付の人に聞き、更衣室で先日もらった制服に着替えてから営業部に向かう。

始業時刻になると、営業部の部長が私を紹介してくれた。

「産休中の葉山さんの代わりに半年働いてくれることになった、須藤さんだ」

私は緊張しながら頭を下げた。

「須藤です。短い期間ですが、頑張りますのでよろしくお願いします」

フロアの社員が拍手をしてくれ、無事私の仕事初日がスタートした。

部長に指名された女性社員が、簡単に仕事の説明をしてくれる。それが終わり、今日の仕事を渡されて一人になると、私は改めてフロアを見渡した。

以前勤めていた中小企業の会社と違い、ワンフロアだけでも相当広い。案内された席からはフロア全体が見渡せて、開放感があった。

（これだけ大きな会社で働くことはなかなかないだろうし、いい経験だから頑張ろう）さっそく渡された簡単なデータ入力をして、私は前向きに仕事を進めていった。

お昼休憩の時間になり、みんなそろそろ移動していく。お弁当を持ってきている人も数人いるようだけど、私は何も持ってきていない。パンフレットには社員食堂があると書いてあったから、それを利用しようと思っていたのだ。

(場所がいまひとつわからないけど、ついて行けば大丈夫かな)

きよろきよろしていると、先ほど仕事の説明をしてくれた女性社員の飯田雅いいたみやびさんが声をかけてくれた。華やかな顔立ちの可愛い子だ。

「須藤さん、一緒に食堂行きませんか？」

「あ、そうしてくださいと助かります」

ぺこりと頭を下げたら、飯田さんはくすつと笑う。

「須藤さんって、丁寧ですね。年が近いんじゃないかと思ったんですけど、おいくつですか？」

「二十六歳です」

「えっ、若い年だ！　じゃあ、敬語はやめない？」

飯田さんは、ぱつと人懐ひとなつっこい笑みを浮かべる。その勢いに押され、私は頷うなづいた。

「え、はい……じゃなくて、うん」

慌てて言い直す私を見て、飯田さんは明るい声で笑う。

(すごくいい人そう)

気軽に話せそうな人がいてホッとしつつ、飯田さんと一緒に社員食堂へ向かう。

食堂に着くと、それぞれ食べたいものを買って、空いていた席に座った。食事ははじめで、飯田さんは唇を指差して言う。

「須藤さんのリップ、すごく綺麗な色だね。朝から思ってたんだ。雰囲気合ってて素敵。お肌もすごくキレイだし！」

「本当？　ありがとう」

(メイクを褒められた……こんな可愛い子に)

心がちよつぴり浮き立つ。

「私、メイク好きなんだ。いろいろ情報交換しようよ！」

「もちろんだよ」

派遣先でこんなふうに話ができる人に会えるなんて、思っていなかった。思わぬ幸運に、自然と顔が緩む。

(よし、気分が上がってきたし、午後も仕事を頑張ろう！)

私はカツ丼を口いっぱいに入れて、頬張る。今朝は朝食が食べられなかったし、午前中は仕事に集中していたから、すごくお腹が空すいていた。

もりもり食べていると、すらりとした長身の男性が歩いてくるのが目に入った。

「んっ」

(桐原先輩……っ)

思いきり頬にご飯を入れている状態で、彼と目が合う。

恥ずかしいけれど、すぐに呑み込むこともできずに、私は黙って会釈した。

しかし先輩は無表情のまま素通りして、奥の席に座って一人で食事をはじめた。

副社長という立場のせいかな、誰かが気安く声をかけることもない。まるで孤高の獅子のようだ。

(……先週顔を合わせたばかりなのに、まったく知らんぷりだったな)

残念に思っていると、飯田さんが興味津々といった様子で身を乗り出してくる。

「ねえ、副社長のこと、気になるの？」

「えっ？」

「あ、今前を通った人、副社長なんだよ。あの人、仕事ができる上に、顔が整ってるからね。それに身長も高いし……。仕事に厳しいせいで、文句を言う女子は多いんだけど、本音では好きだったという人も多いよ」

「そ、そっか」

(高校時代と変わらず、モテモテなんだな)

高校の頃は、桐原先輩のファンクラブがあったくらいだったし、納得だ。

「でも、残念なことに彼、まったく女性に興味なさそうなんだよねー」

つまらなさそうに口を尖らせる飯田さんの言葉に、今度は私が身を乗り出す。

「それ、何か根拠があるの？」

「彼女がいるって噂もないし。過去に果敢にアタックした人は、全員玉砕したらしいよ。……まあ、ああいう人ってフィアンセとかいるのかもしれないけど」

「そっか……」

(告白、全部断ってるんだ。でも先輩は女性に興味がないわけじゃないよね。だって昔、彼女がいたし……)

つらい過去を思い出しそうになり、慌てて記憶に蓋をする。

そんな私をよそに、飯田さんはデザートプリンを食べながらため息をついた。

「だいたいさあ……人間味がなさすぎない？ あの人」

「そうかな。表情が硬いと思うけど」

「それだよ。取引相手には笑顔を見せることもあるけど、普段は能面だし。感情をまったく出さないんだよ」

「そうなんだ」

確かに彼は、まるでバリアを張っているみたいに誰も寄せつけない空気がある。(愛想を振りまくタイプじゃないのも、昔から変わらないな)

「あんまり無表情だから、社員からは密かに『鉄仮面』って呼ばれてるんだよ」

(鉄仮面……)

ちらりと奥の席に目をやると、もう食べ終えたのか、先輩の姿はなかった。

鉄仮面(てつかめん)というのは言いすぎじゃないかと思うけど、高校時代も似たようなあだ名をつけられていた。常に無表情だし、異性への塩対応から、『氷の王子』と呼ばれていたのだ。

(でも本当に冷たい人なら、あの時の私に、シユートのアドバイスなんてしないとと思うんだよね。感情を表に出さないのには、理由があるんじゃないかな。これは、ただの勘だけど……)

そんなことを考えて黙り込むと、飯田さんは楽しげに笑った。

「ふふっ、須藤さんは副社長が気に入っちゃったみたいだね」

「……っ、まあ……興味がないわけじゃないよ」

「やっぱり？」

(何年経っても忘れられない人だしね。それに……)

口に出せないことを、心の中で呟く。

「でも、彼とどうなりたいとかは全然ない。それは本当だよ」

(どういふ関係にもなれないよ。私は、もうとつくの昔に振られてるんだから)

あと少しで食べ終える丼を見つめながら、私は封印しきれない胸の痛みを再確認した。

私は高校時代、先輩にこっぴどく振られている。

今よりも人と話すのが苦手だった私にとって、告白するというのは清水(きよみず)の舞台から飛び降りるような勇気が必要だった。

それは、体育館でシユートの仕方を教えてもらった少し後。あの時の私は先輩への恋心が募りすぎて、もう胸に秘めておくことができなかった。

「あのっ！ 桐原先輩！」

帰宅途中の彼を引き止め、周囲に人がいるのも構わず、手紙を差し出した。何日もの間、書いては消しを繰り返し返した、私の思いを精一杯綴ったラブレター。

両思いになれるとは思っていない。でも、せめて自分の存在を認識してほしくて書いたのだ。

「この手紙読んでいただけませんか」

「え……手紙？」

先輩は少し驚いたように目を見開く。彼に手紙を差し出す私の手は震えていた。

「先輩が好きです。どうか……手紙だけでも受け取ってください」

居合わせた生徒たちがざわめきます。そこで、失敗したと思った。

(うう、見られて……もう少し場所を考えるべきだったな)

湯気が出そうなほど頬を熱くさせながら、後悔する。
 (でも今伝えないと、もう二度と勇気を出せないと思うから)
 先輩は私の顔を興味なさげに見つめ、そっけなく言った。
 「……悪いけど、その手紙は受け取れない」

「え……」

「話したこともないのに、好きだなんて、よく言えるよね。そういう女性の感情って理解できないよ」

恐ろしく冷たい声でそう言われ、私は深い谷底に落ちたような気持ちになった。胸が激しく痛み、声も出ない。

(話したこと、あるんだけど……覚えてないんだな。でも、それを言ったところで意味ないだろうし……つまり、振られたんだよね)

彼は手紙を受け取るうともせず、ため息をついた。

「それに、今は誰かと付き合うとか、考えられない。……予定があるんだ。もう行っていい？」

「え、あ……はい」

放心状態の私を置いて、先輩は何事もなかったかのように立ち去ってしまった。

残された私はまるで晒し者だ。どういう顔をしていいかわからず、俯いて手紙を握

りしめた。

(同じ部活だったのに、顔も覚えてもらってなかったんだ……)

これだけでも十分傷ついていたのに、次の日、私はさらなるショックに打ちのめされた。

部活の後、更衣室に忘れ物をし、取りに戻った時のこと。男子更衣室から、話が聞こえてきたのだ。

「須藤ってさー……」

(え、私?)

「見た目は大人しそうなのに、度胸あんのな。桐原に堂々と告白するなんて……びっくりした」

私の告白を見ていた男の先輩のようだ。今さらながら、恥ずかしくてたまらない。早く逃げようと思った瞬間、静かな声が響いた。

「須藤って……誰？」

桐原先輩の声だ。興味が微塵もないその言い方に、私の心臓がドクンと一つ大きく鳴る。

「うわ、出たよ、モテ男発言。そりゃ、毎日のように告られてたら、名前も覚えられないか」

(そうだよ。告白なんて彼にとつては珍しいことじゃないんだ)
胸を押さえ、動けずにいると、さらに別の先輩の声が聞こえてきた。
「須藤って顔が薄いから、あんま印象に残らないのはわかる気がする」
(……顔が……薄い)

自分の噂をされるのも嫌だった上に、顔が薄いと思われていたことも衝撃だった。
「確かになあ。白鳥玲奈に比べたら、薄すぎて記憶にも残らない感じだよな」

「白鳥さんと比べんなよ。白鳥さんは美人なだけじゃなくて、気品もある最高の女性なんだからさ」

「確かになあ！」

更衣室から笑い声が聞こえてくる。激しい胸の痛みに襲われ、私は自分の制服を強く握りしめた。

白鳥さんというのは学校一の美人で、その上、お金持ちのお嬢様らしい。

そんなマドンナと比べて笑うなんて、あまりにもひどい。

私は逃げるようにその場を走り去った。

(桐原先輩には、体育館でのことも、告白したことも忘れられて。おまけに、大勢の先輩にああやって笑われるなんて……最悪)

私は家に帰ると、すぐに自分の部屋に閉じこもり、枕に顔を押しつけた。泣き声がお

母さんに聞こえたら心配をかけると思って、精一杯歯を食いしばる。

『話したこともないのに、好きだなんて、よく言えるよね』

先輩のきつい一言に心をスタズタにされ、涙が止まらない。

(先輩は理解できないって言ったけど、たった一言優しい言葉をかけられただけで、恋に落ちることはあるんだよ)

心の中で反論しつつ、もう一つの言葉がよみがえってきた。

『須藤って顔が薄いから』

こんな評価が自分に下されたことも、悔しくてたまらない。味わったことのない敗北感に押し潰されそうになる。

(泣いたらこのつらさも、少しは和らぐのかな……)

私はその日、一晩中泣き続けた。十年分の涙を流したんじゃないかと思うほどだ。そのせいか、あれ以来どんなにつらいことがあっても、涙は出ない。

しかも振られた直後、とどめを刺すかのようにさらなる衝撃を受けた。桐原先輩が、学校のマドンナである白鳥さんと付き合いはじめたのだ。

(私には『誰かと付き合うとか、考えられない』って言ったくせに)

心の中で語りながらも、彼にその心情の変化について聞く勇氣も元氣も残ってなかった。残っていたのは、言葉にしきれない絶望感だけ。

（私が相手にされなかったのは、薄い顔だから？ 白鳥さんと違って、印象に残らないような……地味な人間だから？）

涙は涸れた。絶望はあつたけれど、これ以上落ちる穴はない。

その結果、『自分自身が変わらなければ』という猛烈な思いに火がついた。

私を地味だと言った男性を見返してやりたい。

何より、せめて桐原先輩の記憶に残るような女性になりたい……

それが、私がメイクに目覚めたきっかけだった。

（よし……桐原先輩が一目見たら忘れられないような女になってやる）

以来私はメイクにはまり、自分をベストに見せるお化粧方法を探して、試行錯誤の日々を送った。目鼻立ちをばっちりさせ、『薄い顔』と言われないように。

そのおかげか、目を追うにつれて周囲の反応が変わっていった。

「須藤、なんか綺麗になったね」

久々に会う友人に、そんな言葉をよくかけられるようになった。

褒められるのは素直に嬉しい。私は少しずつ、変わることができたのだ。

でも、私のコンプレックスは根深かった。高校時代のショックで、いわゆる恋愛恐怖症になっていたのだ。

（メイクをした顔は綺麗だと言ってくれていても、すっぴんを見たら反応が変わるん

じゃ……）

そう思うと怖くて、男性を受け入れられない。私はいつからか、交際に進む雰囲気になると逃げる癖がでてしまった。

「付き合ってほしいって言ったら、OKしてくれる？」

仲良くなった男友達にそう言われても、私は及び腰になるばかり。

「私、好きな人がいるから」

こんなふうにはぐすようになったのだ。

相手のことは、決して嫌いじゃない。付き合ったら楽しいのかもしれない。

でも、すっぴんの自分を受け入れてもらう自信がなかった。メイクをした顔を褒められると嬉しいけれど、どこか自分を偽っているような気持ちになることすらある。

……とはいえ、悪いことばかりじゃない。

恋愛に臆病になった一方で、私の性格はメイクをしたことで以前より積極的になった。おかげで大学卒業後は無事に就職し、平穏な日々を送ってきた。

まあ、その勤め先も突然倒産してしまい、派遣社員になってしまったわけだけど。

（人生なかなかうまくいかないもんだなあ。いつか、すっぴんを知られるのも怖くないような相手に出会えるのかな……。このままでは恋愛未経験で一生を終えることになってしまう）

こんな不安もあったから、老後にも備えたくて、仕事を一生懸命頑張ってたのに……（偶然の流れとはいえ、先輩の会社に勤めることになるとは……運命って意地悪すぎる）

昼食を終えた私は、大きなため息をつき、複雑な気持ちを持って余したのだった。

それから二週間が経過し、少しずつ仕事にも慣れてきた。面倒を見てくれている社員さんからは呑み込みが早いと褒められ、案外楽しい日々だ。

桐原先輩とはほとんど接点がないこともあり、私の気持ちは安定している。ただ、『副社長は連日夜遅くまで残業している』という噂を聞き、少し心配だ。

その日、順調に仕事を進めていると、上司から声をかけられた。

「須藤さん、悪いけど至急、別棟にある総務部に行ってくれるかな。届けてもらいたい書類があるんだ」

「わかりました」

上司から書類を受け取り、別棟を目指す。その途中通りかかった中庭で、私は思わず足を止めた。

（いっぱい花が咲いてて、すごく綺麗）

「ん？」

植え込みの陰から出ている人の足を見つけ、どきりとする。誰かが倒れているのかと覗き込むと、それは桐原先輩……いや、副社長の桐原さんだった。

（どうしたんだろう……。具合が悪いのかな）

気になってそろそろと庭に足を踏み入れ、桐原さんの顔をうかがう。目を閉じた彼の顔は驚くほど整っていて、まるで人形のようにだ。

（相変わらず、美しい顔だなあ……）

綺麗な顔に見入っていると、桐原さんはハッとされたように目を開けた。私は思わず一歩後ずさる。

「あ……」

「あれ、君……須藤さん？」

「あ、そうです」

（今、須藤さんと呼んだ？ 私のことを覚えてるの？）

思いがけず私を呼ぶ桐原さんの声に、心がぐらりと揺さぶられる。

顔を覚えてもらえたのは、メイクのおかげだろう。頭の中に、歓喜の鐘の音が響いた気がした。

そんな私をよそに、彼はむくりと起き上がって不機嫌そうに言う。

「暇がないようにスケジュールリングされてるはずだね。すぐ仕事に戻って」

「え、でも桐原さんだって……」
 サボってたじゃないですか、と言いかけて、彼のそばに置かれた資料が目に入る。
 (眠ってたわけじゃないんだ……しかも相手は副社長！ 私つたらなんて失礼なことを……)

「副社長室の設備点検の間、ここで資料を読んでいただけだ。気が散るから早く行つて」

「す、すみません！」

鋭い視線にびくりと肩を震わせ、私は慌てて別棟に向かう。

(うう……確かに鉄仮面。表情がなくて怖い。まあ、今のは私が悪いんだけど)

彼には、昔と同じように付け入る隙がない。

(それにしても、社会人になってますます近寄りがたい人になったなあ。副社長っていうポジションは、私には想像もつかないほど忙しいんだろうけど)

総務部に書類を届けて戻る頃には、桐原さんはもう中庭にいなかった。

「はあ……」

営業部の自分の席に戻ると、思わずため息がこぼれる。すると、ポケットに入れていたスマホがメールの着信を知らせて震えた。

(あ……雅からだ)

あれから飯田さん——雅とはかなり仲よくなつて、下の名前で呼び合っている。

『優羽ってば、恋する乙女の顔してない？ 何かあった？』

ギョツとして顔を上げると、机を二つ挟んで向こう側にいる雅が、にやにやしながらこちらを見ていた。

(なんで私の顔を観察してるのよー！)

『何もないよ！』

短くそれだけ返し、すぐに仕事に戻る。

(偶然桐原さんを見かけて、ちよつと怒られて……名前を呼んでもらっただけ)

心の中でそう呟いてから、データ入力に没頭する。桐原さんに会えたことが、思いのほか私の調子を上げていた。大量の書類も、順調に減っていく。

二時間ほど経った頃、急にフロアがピシリと凍ったように静かになった。

「須藤さん、いる？」

(こ、この声は……っ)

「はい。います」

努めて冷静に答えると、書類を手にした桐原さんがこちらへ歩いてきた。彼の能面のよくな表情を見て、嫌な予感しかしない。

「これ、君が作った書類？」

彼の手には、昨日私がデータを打ち込んだ書類が握られている。

「そうです」

「タイピングは速いみたいだけど、ケアレスミスがいくつもある。ミスゼロにしてくれないと、二度手間だ。君を雇っている意味がない」

机にばさりと置かれた書類は、相当急ぎを要求され、最終確認ができなかったものだった。

「すみません、気をつけます」

「謝るだけなら、子どもでもできる。今後、同じミスを犯さないように」

「はい、すみま……いえ、わかりました」

（言い方がきつい……相変わらずだなあ）

縮み上がりながらも、頭を下げていると、さらに注意が続く。

「あと、それ、処分対象の書類だよな？　すぐにシュレッダーにかけて」

「あ……」

（いつの間に置かれてたんだらう）

私がさっき席を立った時だろうか、見知らぬ書類が机の横に積まれていた。

「すぐにシュレッダーにかけてます」

「契約通りの仕事してもらわないと、こちらも困るから。『無心』でやって」

私が面会で言った言葉を引用され、びくりと体がすくむ。

（そうか、名前を覚えてくれたのは、仕事だからか……）

やはり桐原さんが私に興味がないのは以前と変わらない気がした。

（期待するのはやめよう）

「はい……わかりました」

桐原さんが立ち去った後、私は書類をシュレッダーにかけた。

考えないようにしたいのに、気づけば桐原さんのことを考えてしまう。

（厳しいけど……彼は自分にも同じくらい厳しい人だから、悪くは思えない）

桐原さんは昔から真面目だった。

誰もいないところでずっとシュートの練習をしていたり、雨の日も欠かさずランニングしていたり、努力を怠ら^{おそた}ない人だ。そして、試合で誰かがミスをして、そのせいで負けても、責めることはない。

誰より陰で努力し、それを人に見せずに淡々としている。

だから周囲からは心が見えないとか、冷たいと言われてしまっ^うけれど……厳しいのは、きっと誰よりも真剣に物事に向き合っているからなんだろう。

（でも、もう少しソフトに言えば、印象が変わるのに。もしかして、不器用なのかな）
書類を処理しつつ、私は小さくため息をついた。

「あんなことを言われて、よく泣かなかったね」
 昼食の時、雅は食堂でかけ蕎麦をすすりながら言った。
 桐原さんは仕事の鬼で、完璧主義。だから注意されて涙を見せる社員は少ないといふ。

「泣いても仕事は終わらないじゃない。それに、私がミスをしたのは事実だしね」

私が定食を食べつつ思ったことを素直に言うのと、雅は感心したように私を見つめた。

「へえ……優羽って強いんだね」

「強くないよ。怒られて縮み上がったもん。涙が出なかつただけ」

肩をすくめた私に、雅は「お疲れ」と笑った。

（高校時代の失恋以来、涙は涸れてるからね）

心の中で呟き、私はそのままランチを完食した。

食堂を出て雅と別れ、お化粧直しの前にトイレの個室に入ると、数名の女性社員が入ってきた。そして洗面台のあたりで、ガヤガヤと話しはじめる。

「どっかにいい男いないかなー。私だけの王子様的な」

「本当だよ。最近マッチングアプリ使っても、変なのばっかですあ」

（こういう集団があると、お化粧直しをしづらんだよね）

上げかけていた腰をもう一度落ち着け、時間を潰す。

「えー、王子ならいるじゃん。毎日私たちを監視している、あの冷たい目の人」

「ああ……鉄仮面？ あの人はダメだよ。感情を持たないロボットだもん」

（鉄仮面……桐原さんのことだ）

トイレを出るに出不られず、私はその会話を聞くとともになしに聞いてしまった。

「あの人の条件はすべて一流。性格の悪さも一流だよ」

「狙うなら彼でしょってみんな思ってたのにね……。声が小さいとか、ミスが多いとか。細かいことばっかり指摘してさ……最悪。弟の翔也さんの方が可愛くていいと思うな」

「翔也さんは恋人いるでしょ。……あ、もう昼休憩終わるよ。早く行こー！」

そう言うと、女性たちはバタバタとトイレを出て行く。私は咄嗟に個室から出て、彼女たちを追いかけた。

「す、すみません！」

「え？」

私の声に驚いて、三人の女性が振り返る。

「誰？」

「あ、先日新しく入りました、派遣の須藤です」

「へえ。それで、派遣さんが何の用？」

棘のある態度を取られるが、ここで引き下がるわけにはいかない。私はぎゅつと拳を握り、声を振り絞る。

「あの……桐原さんは性格が悪いわけじゃないと思います」

「はあ？」

明らかに嫌悪の目を向けられて、びくりとする。けれど、桐原さんについての誤解を、少しでも解きたかった。

（あの人は……誰よりも努力家なんだよ。私は高校時代、そんな彼をずっと見てた）

だから桐原さんから目が離せなかった。好きで好きで、仕方がなくなつたのだ。

私には手の届かない人だとわかつていても、告白せずにはいられなかった。

彼の上辺の表情や態度だけで、性格が悪いと決めつけてほしくない。

「桐原さんは、すごく真面目な人だと思います。小さいミスが許せないのは、自分に対してもそうだから……じゃないですかね」

私の言葉を聞いて、女性たちはくすくす笑う。

「入ったばかりの派遣社員に、なんでそんなことがわかるわけ？ そうだったらいいなーっていう妄想？」

「私たちが長い間、鉄仮面のこと見てるっつーの」

「こんな変な子、相手するのやめよ。行こ」

私の意見はまったく受け入れてもらえないまま、彼女たちは立ち去る。

「あ……」

昼休み終了のチャイムが鳴る中、私は誰もいない廊下にポツンと取り残された。

（はあ……私も仕事に戻らなくちゃ）

「須藤さん、なんであんな余計なことを言ったの？」

突然聞こえた声に驚いて振り返ると、腕組みをした桐原さんが立っていた。

「き、桐原さん……っ、いつからそこに？」

「君が彼女たちに声をかけたところから。波風を立てるようなことを言っただけ、彼女たちに目をつけられたらどうする。居づらくなるんじゃないか」

確かに、もし因縁をつけられたら面倒だ。半年とはいえ、この会社で過ごすの気分はよくないかもしれない。

「でも、言わずにはいられなかったの」

「君は俺の何を知っているつもりで、ああいうこと言うの？」

彼にとって私は、三週間ほど前に会ったばかりの相手だ。そんな女が何を言うと思われするのは、当然だ。

「何を知っているって……そんな大層なことを言ったつもりはありません。ただ、厳し

い指摘は受けましたが、私は桐原さんが理不尽ことを言っているとは思わないので」

「ふーん……」

桐原さんはいつもの無表情で、私をじっと見据える。

やがて彼は、私の頭にぼんと手を置いた。そしてすれ違いざまに、低い声で囁く。

「俺を庇ってくれたことに対しては礼を言うよ。でも、もうあんな無茶はしなくていいから」

(あ……)

大きな彼の手の感触が、私の全身に甘い痺れのように伝わっていく。

封印したはずの思いが、また溢れてしまっそうだ。

(駄目だよ……私は一回、振られてるんだから)

優雅に立ち去る桐原さんの背中を見て、胸がきゅっと締めつけられる。それは高校時代に何度も感じた甘くて苦い、恋の痛みだった。

どんなに自分を抑えようとしても、彼の姿を見れば胸が騒ぐ。これはもう、自分でコントロールできるものではないみたいだ。

その日は仕事を終えた後、気晴らしに新作コスメをウィンドーショッピングして帰宅した。そこからは手早く夕飯を作って、お風呂に入る。このリフレッシュタイムが私に勤めたい会社があった。そこはとでも働きがいのある社風で、私の経歴も生かせそうなのだ。

(中途採用の募集を見つけてラッキーだったな。しかも、十二月入社だから、派遣の仕事もきちんと満了できるし)

(ご飯を食べたら、履歴書を書く)

シャワーを浴びながらも、今日の私は仕事モードから切り換わらない。実は私には、勤めたい会社があった。そこはとでも働きがいのある社風で、私の経歴も生かせそうなのだ。

とってとても大切なひととき。

(ご飯を食べたら、履歴書を書く)

シャワーを浴びながらも、今日の私は仕事モードから切り換わらない。実は私には、勤めたい会社があった。そこはとでも働きがいのある社風で、私の経歴も生かせそうなのだ。

(中途採用の募集を見つけてラッキーだったな。しかも、十二月入社だから、派遣の仕事もきちんと満了できるし)

募集要項を確かめながら、私は履歴書を何度も書き直していた。応募期限はあと数日……そろそろ完成させないと。

(あの会社は大きいから、入社してコツコツ働いていたら、きっと一生独身でも生きていけるはず……絶対次はあそこに就職する！)

そう決意しつつ、アロマキャンドルに火を灯し、浴室の電気を消す。その瞬間、浴室は一気に異空間になった。

こうすると、心がすつと切り替えられる。湯船に体を沈め、頭をからっぽにした。貴重なリラックスタイムだ。

けれどしばらくして、頭に桐原さんの姿が浮かんできた。想像上の彼は私に笑顔を向け、手を差し伸べてくれる。

（桐原さん、今日も素敵だったな）

そんなことを考え、ふっと我に返る。

（いやあ……私って本当に諦めが悪いよねえ）

苦笑しつつ、頭に手を置いた。桐原さんが昼間に触ったところだ。その重みや温もりがまだ残っているような気がして、胸がじわっと熱くなる。

（あれって私のことを気遣ってくれた……んだよね）

私は久しぶりに胸の奥に甘く温かいものを感じた。

体がすっかり温まった頃、ようやくお風呂から上がる。化粧水を肌に取り込ませながら、鏡の中の自分を見つめた。

（すっぴんの私はやっぱり地味だね……。このままじゃ、桐原さんに顔を覚えてもらえなかったかも）

スキンケアのおかげで肌質はよくなっているが、顔の印象が薄いことはどうにもできない。メイクの力は偉大だと、改めて感じた。

次の日の朝は、とても気持ちよく起きられた。昨日、桐原さんと少し話せたからかもしれない。

（桐原さんの存在が私の中でまた大きくなって。思いが成就することはないけれど）

ど……まあ、ときめく相手がいるのは悪くないと思うことにしよう）

私の気持ちに合わせてくれるかのように晴れた空の下、私は元気に会社へ向かった。

営業部に行くと、いつも以上にバタバタしていて、みんな余裕がなさそうだ。私の机の上にも、すでに書類が積み重なっている。

（うわ……早く仕事にかからないと）

席に座ろうとした時、向かいの席の社員さんが私に気づいた。

「須藤さん。忙しいところ悪いけど、午前中の手が空いた時に資料室にあるパンフレット持ってきてくれる？ 午後には発送準備するから」

「はい、わかりました」

私は急ぎの仕事を確認し、優先順位を決める。そして午前中に終わらせなくてはいいけないデータ入力に集中する。すべて終えた後、ミスがないよう丁寧に確認した。

「……よし！」

完成したデータを担当者に送信し、頼まれていたパンフレットを取りに資料室へ向かう。

そこで待っていたのは、想像以上に大きな段ボール箱だった。それを見て、ううむと唸る。

（結構重そうだなあ……カートに載せるか。でもカートって別棟にしかないんだっけ？

時間をもつたいない)

「持てないこともない、はず」

そう判断した私は、段ボールを両手で抱えた。途端に前が見えなくなる。とりあえず、時おり前を確認しながら、一歩ずつ慎重に歩を進めた。

営業部のオフィスまで、あと半分——そこまで来た頃には、手が痺れ、額にうっすら汗がにじんでいた。

と、その時——ふっと荷物が軽くなる。そして私の手から段ボール箱が離れた。

「こんな無茶ぶりしたの誰？」

段ボール箱を軽々と抱えた桐原さんは、呆れたように言う。

「あ……桐原さん」

今日も廊下で会うなんて、すごい偶然だ。

「また君か」

「あ、はい」

「一人で無理なら協力を頼むべきだろ。怪我したらどうする」

「いえ、大丈夫ですよ。フロアまでそんなに距離はないですし」

(副社長にこんな重いものを持たせるわけにはいかない)

私は慌てて段ボール箱を取り返そうと手を伸ばす。けれど、桐原さんはお構いなしに

ずんずんと歩いて行ってしまう。

「あの、私、持てます！」

声を上げながら駆け寄る私を振り返り、彼は口元を緩めた。

(笑った……!)

その笑顔はびつくりするほど優しく、鼓動がドクンと鳴る。

(作り笑いじゃなくて、自然な笑顔だ……初めて見たかも)

「須藤さんの意欲は認める。でも、前が見えない状態で歩くような無理をするなら、ちゃんと周りを頼った方がいい」

「は、はい……」

思いがけない優しい言葉に、目を丸くする。

「これ、営業部の前に置いておけばいい？」

「はい」

私の返事を聞くと、桐原さんはすたすたと廊下を進み、営業部の前に段ボール箱を下ろした。そして、何も言わずにその場を去る。

(自分が運んだって思わせないように、気を使ってくれたのかな)

「……あ。私、お礼も言っただけ」

我に返り、慌てて桐原さんを追いかけた。けど、彼はもうエレベーターに乗り込み、

追いつく前に扉が閉まってしまった。

「ああ……まさか二日連続で桐原さんと接触できるとは……」

お礼を言い損ねたことは失敗だったが、鉄仮面とまで言われている彼の笑顔が見られたのは、私にとつて大きな収穫だった。

（さりげなく優しくしてくれたたり、微笑んでくれたり……。無意識だろうけど、罪な人だな）

封じたはずの思いが再燃するにつれ、胸の痛みも増している。わかっている、惹かれないにはいられない。私は、そんな自分を持って余すのだった。

それからしばらく、桐原さんと会えない日が続いた。雅の情報によると、彼は普段ほとんど取引先に出かけていて、社内にいることは結構珍しいらしい。

（じゃあ社内何度か会えたのは相当ラッキーだったんだな）

桐原さんの姿を見られないのは残念だけど、私の仕事も忙しくなってきた、彼のことを気にしている暇はなくなっている。私は大量の仕事に追われ、化粧直しもろくにできない日々を過ごしていた。

そんなある日、終業後に帰り支度をしていると、雅が小さな紙袋をくれた。

「優羽、これあげる」

開けてみると、新作の口紅が入っている。仕事用で使っている口紅よりも華やかな色で、素敵だと思っていたものだ。

「あ、これ欲しかったやつだ！ いいの？」

「この色が優羽に合うと思って。よければ使って、私も色違いで買ったの」

「ありがとう、雅！」

「優羽、超頑張ってるし、これでリフレッシュして」

「うん、本当にありがとう」

仕事でくたびれた心に、この気遣いはとてもうれしい。

私は更衣室で着替えをし、帰りがけに寄った化粧室で、さっそく口紅を試してみた。雅が言った通り、その色は私に合っている気がする。

ついでにばばっと化粧直しをすると、疲れが吹き飛んだような気がした。

（最近、ほとんど化粧直しできてなかったもんね。またちゃんとしよう）

そう思いながら化粧室を出る。するとエレベーターホールで、ちょうど外から戻ったらしい桐原さんとばったり出くわした。

（わあ……なんだか久しぶりだな）

「お疲れ様です」

少し緊張しながらぺこりと頭を下げる。すると桐原さんは立ち止まって、何か言いた

げな顔をした。

「あの……?」

不思議に思っただけでも、彼は私の顔をじっと見つめるばかりだ。私は及び腰になる。私の顔に何かついてますか?」

「いや。なんだかいつもと印象が違うなと思って」

「えっ?」

「よくわからないが、ちょっと華やかな雰囲気だな」

その言葉で、口紅の色が違うことを言っているのだと気がついた。

(桐原さんって、メイクの違いとかわかるんだ……)

意外すぎて言葉が出ない。けれど、褒められたのはすごく嬉しい。

「あ、ありがとうございます」

「いや」

そこで桐原さんはゴホゴホッと咳き込む。そういえば、彼の顔が少し赤いような気がする。

「桐原さん、お風邪ですか?」

「いや……そんなことはないんだが……。じゃあ、お疲れ様」

彼は覇気がない様子で、エレベーターに乗り込む。その背中に、慌てて声をかけた。

「お疲れ様です! あの、お大事にしてください!」

(大丈夫かな……)

桐原さんはそんなことはないと言っていたが、明らかに具合が悪そうだ。

ふと視線を落とすと、二つ折りの財布が開いた状態で落ちていた。拾おうとしゃがみ込んだら、財布のカード収納に入っている免許証の名前が見える。

(これ、桐原さんのお財布だ! どうしよう、届けないと)

私は慌ててエレベーターに乗り込み、副社長室に向かう。副社長室の前に着くと、ドアをノックした。しかしいくら待っても返事がない。

もう一度ノックするが、やはり返事はない。

(もしかして、いないのかな?)

不在なら、鍵がかかっているだろう。私はそれを確かめるため、ドアノブに手をかける。すると、ドアノブはスムーズに回った。

(鍵が開いているなら、いるってことだね。それなのに返事がないのは変じゃない? あ、桐原さんはさっき、体調が悪そうだった……まさか、倒れてたりしないよね?)

いよいよ心配になり、そっとドアを開けた。

「桐原さん、すみません。須藤ですが……」

そう声をかけながら部屋の中を覗き込むと、桐原さんは靴を脱いでソファに横になっ

ていた。私は驚いて思わず駆け寄る。

彼は目を閉じていて、どうやら眠っているらしい。ネクタイを緩めており、ボタンの外れたシャツの隙間から綺麗な鎖骨が見えて、ドキッとすする。

(す、すごい色気なんですけど……いやいや、それどころじゃない)

「桐原さん？ 大丈夫ですか？」

小声で尋ねると、彼は目を閉じたまま、小さく口を開けた。

「ん……大丈夫だ……少し眠ればすっきりする……」

「でも、結構つらそうに見えますよ。こんなところで寝たら体調が悪化しそうですし、今日は帰ったらいかがですか？ お一人で帰れますか？」

「ああ……楽になつたら……」

彼はそう呟き、すうっと眠り込んでしまう。

そっと彼の額に手を置くと、熱はそこまで高くない。彼が言うように、一人で帰れないことはないだろう。けれどこのまま何もかけずにソファで寝ていたら、熱が上がってしまふかもしれない。

(困ったな……。あ、そうだ！)

私は急いで営業部の自分のデスクに戻り、冷え対策で使っている私物のブランケットを持ち出した。背が高い桐原さんの全身を包むほどの大きさはないが、少しは体を温め

られるだろう。

副社長室に戻ると、彼にそっとブランケットをかける。そして、目を覚ました時に不審に思われないよう、メモを残した。

「派遣の須藤です。お財布が落ちていたので訪ねましたが、ノックをしても返事がないだったので入室させてもらいました。勝手をして申し訳ありません。お大事にしてください。ブランケットは折を見て取りにきます……と」

メモはお財布と一緒に、ローテーブルに置いた。

(桐原さんが、早く元気になりますように……)

『副社長室に勝手に入るなんて』『余計なことをするな』と怒られる覚悟をしつつ、彼の回復を祈り、部屋を後にしたのだった。

次の日の朝、出勤すると私の机の上に綺麗に畳まれたブランケットが置かれていた。

(桐原さん、体はもう大丈夫なのかな？ ……わざわざ返しにきてくれたんだ)

ブランケットを手にとると、間にメモが挟まれている。それを見て、一気に頬が熱くなつた。

『昨日はありがとう。お礼をしたいから、空いている日を教えてください』

そんなコメントの下に、メールアドレスが記されている。

立ち読みサンプル はここまで